



私の歩んだ道

武藤 正彦*

はじめに

皮膚を通して、皮膚病変のみならず全身をみて (allgemeine untersuchung) 治療をする皮膚科医の仕事は実にやりがいがある。一方で、皮膚科学という学問は休むことなく進歩し続ける生き物でもある。未来に向けて走り続けるために、一人の学徒として歩んできた37年間の道程をここで一度振り返っておきたい。

I. 山口大学学生時代

私は終戦の傷痕がいまだ残る昭和27年に佐賀市で生を受けた。長兄は満州で肺炎のために昭和20年に亡くなったと両親から聞かされた。

佐賀県立佐賀西高等学校 (文系クラス) を昭和46年3月に卒業し、昭和48年4月に山口大学医学部に入学した。私の家は藁葺き屋根の兼業農家の家で、毎晩夜半になると天井裏で数匹のネズミたちが大運動会をするような貧乏な家庭であったので、当然大学進学をするにせよ、学費は大丈夫か、と父親は心配した。

幸い、日本育英会の特別貸与奨学金を受給することができた。当時は月額12,000円の奨学金に加え、家庭教師のアルバイトを何件か受け持つことで、親からの仕送りがなくとも、生活費と授業料を捻出できた。この点は、わが国の優れた教育支援制度のお蔭であるといつも感謝している。2017年度から施行される低所得世帯向

けの返す必要がない給付型奨学金の国の支援制度は歓迎すべき制度と思う。

話をもとに戻すと、中学・高校では陸上競技をしていたので、大学入学後も迷うことなく陸上競技部に入部した。競技の成績は向上しなかったが、練習の後に飲む1杯のビールが美味しいことを学習することになった。医進課程を経て、専門の1年生 (M1) になり山口市から宇部市に引っ越した。M1の夏から、解剖学第二講座の黄基雄教授のもとに出入りし、電子顕微鏡の扱い方を教えていただくことになった。包埋した標本の薄切切片を作るためのガラスナイフの作り方もコツがあって、最初のうちは苦労の連続であったことを今でも鮮やかに覚えている。解剖学教室であったから当然に学生実習用の献体保存作業が待っていて、人手不足のため、私もよくホルマリン注入等の作業の手伝いをした。このようなことが奏功してか、私のために教官用の部屋を一つあてがってもらった。今から思うと、学生の身分でありながら、勉強用に部屋のスぺースを頂戴できたことは誠に幸せだった。また、そのように接していただいた黄教授の度量の大きさに感謝申し上げたい。

II. 笹月先生との出会いと大学院時代

山口大学を卒業後、家内と4月下旬に見合い結婚を済ませ、今でいう初期研修医を経験することなく、5月連休明けに上京し東京医科歯科大学難治疾患研究所人類遺伝学部門の免疫遺伝

* Muto, Masahiko (山口大学名誉教授)

ご自宅：〒755-0049 山口県宇部市西小串1-5-6

学者笹月健彦教授の門を叩くことになった。最初の1年間は自分たちの実験に必要なガラスチューブやピペットなどの洗浄や細胞培養に必要なRPMI-1640などの滅菌培養液を作ることなどを覚えながら、一方で実際にHLAタイピングのやり方を習得した。2年生になり具体的な研究テーマとして、「スギ花粉症の免疫遺伝学的解析」を与えられた。1980年代初頭はちょうどスギ花粉症の話題が新聞等でも大きく取り上げられはじめた時期であった。早速、スギ花粉症患者の検体を集めるべく同大学医学部附属病院耳鼻咽喉科の斎藤洋三助教授の外来について、別室で該当する患者さんの採血をさせていただいた。問診でスギ花粉症の多発家系であるとわかったときには、週末に患者さんのご自宅をじかに訪問して、ご家族全員の採血をする地道な作業が続いた。検体数が統計学的検定に耐えるまで集まった段階で、スギ花粉症とHLAとの相関および連鎖の有無の解析を始めた。その結果、スギ花粉症はHLA-A33-B44-DR6と弱い相関を示すことがわかったが、その後、堀らによる同様の研究から実は真に相関するHLAはHLA-DP5であることが明らかにされた。他方、スギ花粉症多発家系を用いた連鎖解析からは、罹患同胞の間では2個のHLAハプロタイプを共有することが有意に多い結果が得られたので、スギ花粉症とHLAとの相関は、HLAと疾患感受性との連鎖が根底にあるためにみられる現象である、との結論を導き出した。その後、東京大学医学部免疫学教室の多田富雄教授のご好意で、同教室の野中誠先生が米国で開発された*in vitro*抗原特異的IgE抗体産生系の手技を教えてください、それをさらに半年ほど時間をかけてスギ花粉抗原(Cry j1およびCry j2)特異的IgE抗体を患者由来リンパ球から誘導する実験系を確立するに至った。かなりの苦労の末にでき上がった実験系であったが、一連の研究から、HLA-DR分子がIgE免疫応答を誘導するのに重要な分子(=免疫応答遺伝子産物)であることを証明できた。この実験系はアイソトープを使う実験系であり、しかも実験系が完成するまでにかなりの



著者近影

時間を費やしたので、研究資金を調達される笹月先生には多大なご心配をおかけしたのではないかと自分が教授になり教室の研究費の管理を手掛けるようになって初めて気づいた。まさに、親の心子知らずの世界であった。以上の研究成果を京都で開催された第5回国際免疫学会で、生まれて初めて英語で発表した。下手な英語での発表であったにもかかわらず、世界の一流の研究者からいくつかの質問がなされ、何とか回答した。学会期間中に発行されたImmunology Congress Newsに自分の発表内容が掲載されたのを見て、自分の仕事は世界で評価されているのだと興奮したものであった。

当時、不夜城といわれたお茶の水の笹月研究室で心身ともに鍛えていただいた。同研究室出身である河野陽一、西村泰治、太田伸生、兼岡秀俊、平山謙二、安川正貴、松下祥の先輩および同輩諸氏がその後全国各地で教授として活躍することとなった。

一流の研究を行っている笹月研究室には、国内のみならず海外からも、遺伝学の大家であるオックスフォード大学のW. Bodmer教授など、多くの著名な研究者や臨床家が訪れ、私たちも大いに感化されたことを覚えている。研究のスピードおよび正確さの重要なことを身をもって体験することができた青年時代の貴重な時間であった。レアギンの正体がIgEであることを発見された石坂公成教授(ジョンズ・ホプキンス大学)のもとに1年間の留学をすることができた

のも、まさに笹月研究室にお世話になっていたからだと思っている。

当時、スギ花粉症はスギ花粉抗原 (Cry j1 および Cry j2 抗原) に対する鼻アレルギー症状を呈する I 型アレルギー反応であるにすぎないと考えられていたものが、実はスギ花粉抗原 (Cry j2 および Cry j3) は、トマト (PG2A)、リンゴ (Mal d2) およびバナナ (Mus a4) などにより惹起される花粉—食物アレルギー症候群と深く結びついていることが近年わかり、日本スギ (*Cryptomeria japonica*) の花粉抗原に関する分子レベルの研究はこれからも深化するにちがいない。

Ⅲ. 皮膚科医入門

アメリカから帰国後、自分は頭脳明晰とはいえないので、基礎医学を続投することは止め、臨床医、それも比較的時間がとれそうな皮膚科医を目指すこととし、恩師の笹月先生が九州大学に異動されたのを機に、私も別府市にある九州大学生体防御医学研究所附属病院皮膚泌尿器科学の中溝慶生教授のもとで修練を積むこととした。中溝先生は威風堂々たる趣がある先生だと初対面のときに実感した。皮膚科病棟に入院している患者さんの大半は乾癬治療を目的として、北海道から沖縄に至る全国各地からはるばる別府にきた方ばかりで、治療はコールタール軟膏外用と温泉療法 (単純泉) の併用療法が中心であった。皮膚科外来の隣が膠原病内科外来であったため、数多くの膠原病の患者さんをみる機会に恵まれたことも、その後の私にとって大きな財産となった。Erwin Baelz 著『日本鉱泉論』の現代的再評価を含め、温泉療法がなぜ皮膚病に効くのか、今一度エネルギーシステムに軸足を置いた現代科学の立場から分析してみる価値はあるように思う。

中溝先生はゴルフがお得意になるが、私はできない。二人の間の共通点は酒盛りが好きである点にある。ほかの先生から、中溝先生と武藤君の接点はどこにあるのだろう、としばしば質問を受けることがあった。中溝先生曰く、「武藤君、酒は楽しく飲まなくてははいけない。ひとに

よっては、酒を酌み交わす中で、仕事の話を長々とする人がいるが、あれは良くない。仕事の話は5分以内で止めるべし」。人生の先達として正鵠を射た内容であり、私の人生に対する眼をひらいてくれた名言であると今でも敬愛している。

Ⅳ. 山口大学時代

山口大学医学部皮膚科学教室の歴史は昭和22年に遡る。同年8月、昭和19年4月に開校した山口県立医学専門学校 (昭和24年に山口県立医科大学に昇格) に初代教授として京都大学講師の斉藤忠夫先生が着任され、昭和38年3月大阪市立大学に転任となり、その後任には同じく京都大学より藤田英輔助教授が赴任された。同教室は昭和41年4月に国立移管となった。私は藤田教授に皮膚科学の講義と外来実習を教わることができた。先生は、いつも関数記号を用いて皮膚病 (D) の成り立ちを解説されたことを鮮明に覚えている。私の手元にある当時の講義ノートを開いてみると、 $D = f[(\text{先天素因} + \text{後天素因}) \cdot \text{原因}]$ の式がノートの至るところに記述してある。皮膚病を含むすべての疾病に対して、この思考プロセスは非常に理解しやすい考え方なので、今日に至るまで実際の臨床で活用させてもらっている。藤田先生は昭和59年3月に定年退官となられ、第3代教授として本学出身の麻上千鳥助教授が昭和60年1月に昇任された。私は平成元年7月に前任地から母校である山口大学へ病院助手として転任することを麻上教授に許していただいた。麻上教授の下で助教授を4年間勤め、平成9年9月に第4代教授として昇任することとなった。預かった皮膚科教室をどのように運営してすべきかを考えたとき、とにかく医局の人材確保が最重要と考え、そのために奔走した。診療・教育・研究の三本柱のうち、地方大学としてはやはり診療の充実が最優先と判断し、その中でもこれからは皮膚外科の人材育成を優先しようと思った。

幸い、中溝慶生先生と親交があった故武田克之先生 (元徳島大学長) のご理解・ご支援のもと、同大学形成外科の中西秀樹教授 (当時) の教室か

ら形成外科専門医をわが皮膚科学教室に派遣してもらえることになり、以来私の退任時までの10年間継続して後任を派遣してもらうことができた。お蔭で当教室の皮膚外科診療の技量は格段に向上し、顕微鏡下での血管吻合も上手に行えるようになった。学内の他の外科系診療科からの手術応援要請の数も増加傾向にあり、私の誇りでもある。

研究面では、前任地でやり始めた乾癬の病因・病態解析を軸に展開することとした。尋常性乾癬の原因遺伝子を単離・同定しようと計画したが、退任時までには明らかにすることはできなかった。その一方で、汎発性膿疱性乾癬の原因遺伝子(*IL36RN*および*CARD14*)の解明には多少の貢献をすることができた。私の研究手法は地味なものであり成果が出にくいところがあるが、乾癬を研究テーマとして6名の教室員が医学博士号を手にすることができた。そのような中で、「稀少難治性皮膚疾患に関する調査研究班(研究代表者:岡山大学 岩月啓氏教授)」に参加することができたことは幸せであった。この研究班はハイレベルの研究班であり、よい意味で常に緊張感があった。それに続く慶應義塾大学 天谷雅行教授の研究班でも同様であった。その他、医真菌学の立ち上げに順天堂大学の小川秀興理事長にも大変お世話になったことを記しておきたい。

話は移るが、O. Hornstein(Erlangen)教授と西山茂夫教授(北里大学)が企画の労をとられた日独皮膚科学会の第3回学会(Freiburg)にシンポジストとして初参加をした。ドイツには行ったことがなかったので、初夏の森の美しさと澄んだ清流に心うたれた。まさに、Flüsse des Lebensの世界だと思った。これを機にDresdenのM. Meurer先生とも知り合うことができ、平成17年10月、下関市(海峡メッセ下関)において

第57回日本皮膚科学会西部支部学術大会を開催した際に、招請講演者として来日いただいた。教室員にもMünchenでの海外研修などに参加させ、見聞を広めてもらうように努めた。

V. 病院経営

医学部附属病院長から、関連病院の病院長に出てくれないか、といわれ一度固辞した経緯があったので、今回は素直に応じることにした。病院長になってみると、入院稼働率の大切さがよくわかった。それと同時に、すべての診療科内での皮膚科の位置づけもよくみえてくる。以前私がまだ大学在職中に、ある関連病院の病院長から、「皮膚科を常勤から非常勤の勤務に変えてほしい」との申し出を受けたことがある。そのときは私もカットとなったが、今にして思えば、経常利益率を考えてのことだったのだろう、と同情できないこともない。

こんなことにならないように、やはり、他科から信頼される皮膚科であるべく、専門性と医療の質を上げ、他科の医師から皮膚科は絶対ないと困る診療科だといってもらえるように、私たちも精進する努力を怠ってはならない。これを、若い後輩皮膚科医への私からのメッセージとしたい。

おわりに

中国の古典『大学』(岩波文庫版)に出てくる以下の詩句を紹介して本稿を終える。

苟に日に新たに
日に新たに
又日に新たなれ

私は、殷の湯王の洗面のための青銅製水盤に刻まれた9文字のこの素朴な詩句に幾度となく元気づけられた。今日の私は、昨日の私ではないぞ。生まれかわったのだ。

